

# 人獣共通感染症 「エキノコックス」を防ぐ

観光客にとっては可愛いアイドル、  
北海道民にとっては害獣——。

こう聞いて思い浮かぶ動物はなんだろうか。

日本ハムの「きつねダンス」がブームになるほど、身近な動物のキツネ。皆さんは、「エキノコックス症」と呼ばれる感染症をキツネが媒介し、その死者数はヒグマによる死者数よりもずっと多いことをご存じだろうか？

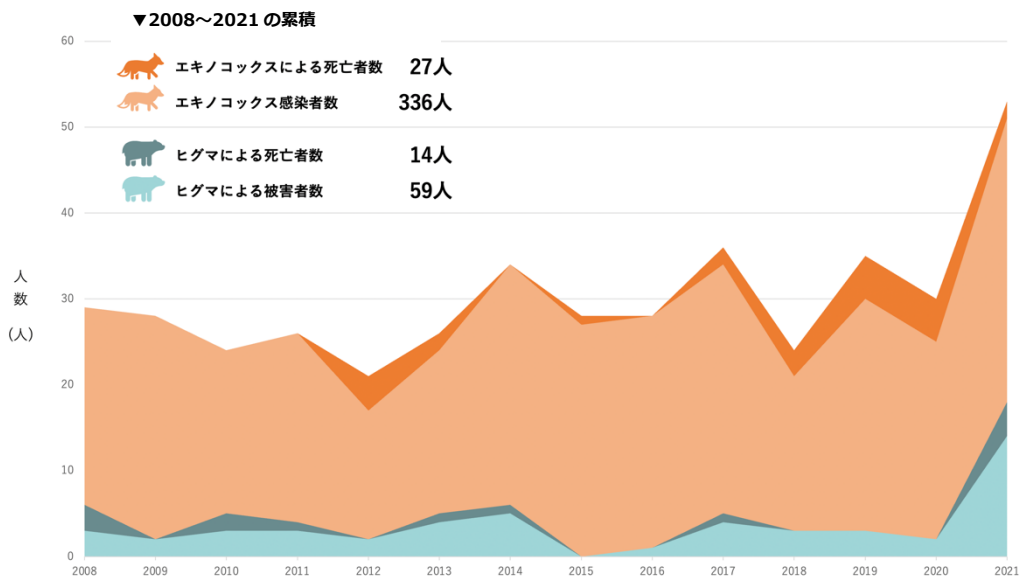
## 身近なキツネに潜む大きなリスク

エキノコックス症は、過去20年にわたって毎年20～30人の新規患者が報告されている北海道の風土病。この感染症はキツネやイヌに寄生するエキノコックスという寄生虫が人間の肝臓に寄生し、肝機能障害を引き起こす。有効な治療薬は開発されていないため一度発症すると肝臓の外科切除

をするほかなく、切除の前に症状が進行してしまえば最悪死に至る。

実はヒグマにおける負傷や死亡を含めた被害者数とエキノコックス症による被害者数（感染者と死亡者）を比較すると、エキノコックス症の方がずっと多いのだ（図1）。

↓図1（池田講師提供）



国立感染症研究所（2022）、政府統計の公開窓口e-stat（2023.9.15）、環境省（2023.11.1）をもとに作成

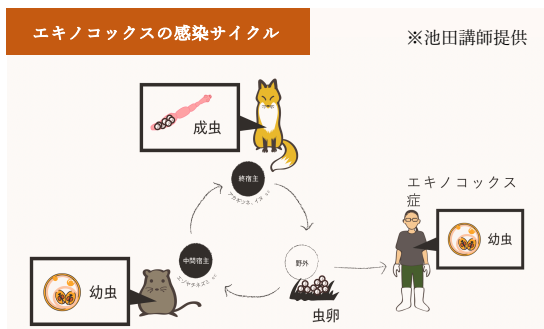
エキノコックス症を人に媒介するキツネのエキノコックス感染率が北海道全体で増加しており、札幌市に生息するキツネは実に40%ほどが感染個体だ。また、2019年に愛知県の一部地域でエキノコックスの定着が報告されるなど、感染は道内だけでなく道外でも増加している。

## エキノコックス対策最前線では

エキノコックス症を防ぐ方法を、エキノコックスの疫学を専門とする北海道大学の池田貴子講師（獣医学博士）に聞いた。

池田講師は『北海道でキツネを駆除していた時代もあったが、キツネは厳密な縄張り性で、空いたところに新しいキツネが入るだけなのでエキノコックスの防除にはあまり意味は無い。「山に帰してあげて」という声もあるが、ヒグマとは違いキツネは市街地の中の巣で代々暮らしているの、山に帰る場所は無い』と話す。

では、エキノコックスを防ぐ手立てとして



何が有効なのか。実はその解決策は20～30年前に実験段階で確立されている。その方法とは、「駆虫薬入りベイト散布法」だ。「ベイト」とは罌の餌を意味し、キツネが好む魚粉に駆虫薬を混ぜ、それを製菓用の油で固形にまとめたものである。これを食べたキツネの体内からエキノコックスが排出され、月に一回散布することで、キツネの感染を防ぐことができる。

### 適切な取り組みを広めるには

ニセコ町は2009年からベイトの散布を始め、毎年10月に採取した糞からエキノコックスの感染状況の調査をしている。その結果、ベイト散布前よりも大幅に感染率が低減したことが分かった(図2)。

ベイトの作成と散布は町内のボランティアによって行われている。ニセコ町の職員によると、「市民からの苦情や反発は無く、むしろ実施してくれてありがたいという声が多い」という。ニセコ町では成功しているエキノコックス対策だが、北海道の他の自治体での実施はなかなか広がらない現状がある。

↓図2 (ニセコ町 HP より引用、一部改変)

池田講師は「感染していないキツネで街を埋めておけば他所からキツネが入ってこないため、クリーンなキツネでエキノコックスへの防御線を張ることができる」と話す。北海道では、有効な効果を示すこの駆虫薬入りベイト散布を札幌市の一部やニセコ町など一部地域で実施している。

「事件として報道されるヒグマと違ってインパクトが少なく、被害の実態と市民の感覚とのギャップがあるために社会に必要な対策がなされづらい」と池田講師。

「カワイイ」ことで見えなくなりがちなキツネのリスク。北海道の自然に思いを寄せる私たち一人一人が当事者意識を持って予防に取り組み、野生動物との関係を考えることが必要だ。

### 個人ができる予防

- ・生ごみの適切な処理
- ・イヌを放し飼いしない
- ・沢水に触らない
- ・野菜は十分に洗ってから食べる

